

ユア・マイ・サンシャイン

2006(平成18)年7月27日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督・脚本=パク・チンピョ/出演=チョン・ドヨン/ファン・ジョンミン/ナ・ムニ/ソ・ジュヒ/ユン・ジェムン/リュ・スンス/チョン・ユソク (東芝エンタテインメント配給/2005年韓国映画/122分)

……『私の頭の中の消しゴム』(04年)を抜く大ヒットとなったラブストーリーのヒロインは HIV 感染者、そしてヒーローは嫁不足に悩む農家の長男坊という異色の設定だが、何とこれは実話にもとづく物語……。不器用な出会いから結婚へ、そして幸せの絶頂から苦難と離別の道へ。ドラマティックな展開を見せる激動の物語にあなたは引き込まれるはず。そして、「僕は君を死ぬまで離さない」という言葉が真実であることが、クライマックスの刑務所での面会シーンで……。これで泣けなかったら、あなたの感性はちょっと心配……？

農家の嫁不足は日韓共通……

「農家の嫁不足」という深刻な社会問題をモロにテーマとした面白い映画が『恋するトマト〜クマインカナバー』(05年)だったが、本作の背景にある社会問題もそれと全く同じ。生まれ育った農家で母親(ナ・ムニ)と一緒に暮らすソクチュン(ファン・ジョンミン)は、36歳になりながら未だに独身。彼の夢は、①自分自身の牧場を持つこと、②結婚して幸せな家庭を築くことだが、①はともかく②は当面見込みがなさそう……。ある日、ミニスカートでさっそうとバイクにまたがるウナ(チョン・ドヨン)とすれ違ったソクチュンは、その瞬間にウナに一目惚れ……。以降、ウナが勤めている喫茶店「純情」に通い始めたが……。

ウナはかなりワケあり風……

「私はワケあり女！」と高飛車に出ていたウナだったが、毎日喫茶店に通って

きてしほりたての牛乳と花を届けてくれたり、看板のそうじから酔ったウナの送り迎えまで、不器用ながらも一途にウナに尽くすソクチュンの姿を見ているうち、次第にその情にほだされていったのは当然。たしかにウナはかわいいし、愛嬌もあるから、ソクチュンがウナに一目惚れしたのもわかるが、他方で、ウナは夜はホステス+アルファ(?)の仕事をしているようで、ソクチュンとすんなり結婚して、農家の嫁におさまるようなタイプではなさそう……?

それでも2人は遂にゴールイン!

ソクチュンの母親はもちろん、兄夫婦もソクチュンがウナとつき合うことには反対だったため、母親は無理矢理見合い話を持ち込んだ。そして、今日は喫茶店「純情」で行われるその見合いの日。

ソクチュンのそんな姿を見たウナはやはり気分がよくなかったようで、普通は行きたがらないコーヒーの出前をやったのが不運だった。ホテルの部屋の中にコーヒーを届けたウナに対して、その客は別の「出張サービス」を強要しようとしたため、そこで一悶着がおこり、客からビールビンで殴られたウナは頭から出血して倒れ込んでしまうことに。そこで病院に担ぎ込まれたウナを懸命に看病したのがソクチュン。そんな情にほだされたウナは、遂にソクチュンとゴールイン。そして、家事全般をそつなくこなす意外に家庭的なウナに母親も大満足。ここに幸せいっぱい的一家が生まれたかのように見えたが……。

突然の前夫の登場で何もかもメチャクチャに……

幸せいっぱいの生活を満喫していたソクチュンとウナだったが、ウナのことをオッペンと呼ぶ前夫(チョン・ユソク)が登場したことによってその生活はメチャクチャに……。ある日、留守を守っているウナにかかってきた電話の相手がウナの前夫。「どうしてここにいることがわかったの?」と恐怖に脅えるウナだったが、ソクチュンが一方で子牛の誕生に喜んでいる間に、家の中では、突然乗り込んできた前夫によって、ウナは強姦同様の肉体関係を強要されていた。そのうえ、男はソクチュンにも「オッペンは俺の女房だから手を引け」と脅かす始末。さて、ソクチュンはどうするのだろうか……?

女房か、牧場か、ソクチュンの決断は……？

ウナが以前にオープンと名乗っており、この男と結婚していたことはまちがいない事実のようだが、今さらウナと別れることなどソクチュンには到底できない話。そこで、ソクチュンは女房（愛）をとるか、それとも牧場経営（金）をとるかの決断を迫られたが、その決断は当然、愛……。牛を手放して2500万ウォンの金をつくり、これを手切れ金として男に渡し、かつ念書にサインすることによって一件落着……。 「2度と顔を見せたら殺すぞ」とすごむソクチュンの剣幕に、前夫は卒直に従ったように見えた。しかし、この男はもっと粘着質……。金を受け取った一方で、男はウナに対して「金はいらぬ。もう1度やり直そう」と復縁を迫ったから、ウナはそれを打ち明けることもできず、1人つらい立場に……。

ここでやっと、この映画最大のテーマが……

バイクに乗るウナをはじめて見たソクチュンが思わず方向転換し、その後をつけた結果たどり着いたのはある病院だった。集団検診のため、ウナもみんなと一緒にこの病院で血液検査、尿検査などを受けていたわけだ。前夫の登場によってメチャクチャになっているソクチュンの家に「オープン」を訪ねてきたのが、ある年配の男。なぜウナではなくオープンを訪ねてきたのかと不審に思ったソクチュンが、この男を追及したところ、彼は実は病院のドクターで、オープンに対してある重大な告知のためにやってきたもの。ソクチュンがオープンの夫だと聞き、「絶対内緒だよ」という前置きつきで話してくれたのは、何とウナはHIV感染者だということ。そして、彼はこの話を早くウナに伝え、夫であるソクチュンも一緒に病院に検査を受けにくるように言い残して去っていった。さあ、これは大変だ。

1人検査を受けたソクチュンは幸いにも陰性だったが、ウナに対してHIV感染のことを打ち明けられないソクチュンは1人悩み、毎晩飲めない酒を飲んで帰宅するという荒れた生活になっていった。そんなソクチュンの姿を見て、自分の前夫のせいでソクチュンが苦しんでいると理解したウナは、遂にある日「だますつもりはなかった。心から愛していた。お金は必ず返すわ」という置き手紙を残して、1人家を出て行くことに。帰宅してこの置き手紙を読んだソクチュンは、

「それは違う！」と叫んで外へ飛び出したが、もう後の祭。こんな誤解と行き違いによって、あれほど幸せだった夫婦が永遠に離れ離れになってしまうのだろうか……？

ウナはどこで、何を……？

ウナが姿を消した後、腑抜けのようになってしまったソクチュンだが、ウナが HIV 感染者だったと知ったソクチュンの母親や兄が、ウナの後を追いかけることを禁止したのは当然のこと。しかし、律儀にもソクチュンの元に金が送られてきたため、ソクチュンはその送金先の銀行を調べに銀行にやってきたが、「現金の場合は振込人の住所はわかりません」とにべない返事……。仕方なく、ソクチュンは家に戻り、悶々とした失意の日々を1年以上過ごしていた。しかし、2002年の日韓ワールドカップで韓国が4強進出を決め、韓国中が沸き立っているその時、ソクチュンのケイタイにかかってきたのは、あの男から……。これによって、ウナが警察に逮捕されているとの情報が……。 「美人街」で働いていたウナは、HIV 感染者であるにもかかわらず売春をしたため、傷害罪や売春防止法違反の罪に該当するというわけだ。急いで警察署に駆けつけたソクチュンは1年ぶりにウナの姿を見て、「必ず俺が助けてやる！」と叫んだが、ウナの反応は……。この映画のこんな物語は、実は2002年の新聞記事に出た実在の報道にもとづくもので、それは HIV 感染者が身体を売っていたというショッキングな事件。たしかに、このときウナは生活のため、そしてソクチュンへ返すお金をつくるために身体を売る生活をしていたが、彼女自身は自分が HIV に感染しているとは全く知らなかったはず。だってソクチュンはウナにそのことを説明していないのだから……。

それでもウナは有罪……？

毎日面会に訪れるソクチュンと会うのを、ウナが拒否したのはなぜ……。ウナの心は、ここまで自分のことを想ってくれるソクチュンに会って直接話をしたかったはず……。したがって、面会の拒否は、ひとえにソクチュンの母親や兄の申し出に気を遣ったことによるもの……。ウナの裁判が国選弁護なのか私選弁護なのかはわからないが、スクリーン上で見る限り、若くて真面目そうな弁護士がウナの弁護人になっているし、少しだけ流れてくる法廷での彼の弁論を聞いてい

ると、それなりにきちんとした弁護をしていたようだった。しかし下された判決は、HIV感染者であることを知りながら身体を売っていたという事実認定であり、懲役2年6カ月という結構重い罰。売春防止法違反は有罪かもしれないが、HIV感染者であることを自分で認識していたか否かについては、弁護側がきちんと反論すれば起訴事実が認められることはないはず……。もし、私がウナの弁護人になっていれば、もっとちゃんとした弁護をしてあげることができたし、懲役1年、執行猶予3年くらいの判決にすることができたと思うのだが……。

こんな感動的な面会シーンをはじめて！

私は弁護士という職業柄、刑事弁護を担当する時は、警察署や拘置所などでガラス越しに被疑者や被告人と面会することに馴れている。また、裁判モノの映画にはよく面会シーンが登場する。その面会室の大きさやその設計・設備のサマは、マイクで話す方式や真ん中にあいた金網つきの窓を通して話す方式などいろいろだが、共通しているのは、許されるのは話すことだけで、接触したりモノの受け渡しをすることは絶対にできないようになっているということ。ところが、この映画の面会シーンによってその常識が覆されるから要注目！ まあ、こんな風に冗談めいて書いているが、この面会シーンこそが、この映画があの大ヒットした『私の頭の中の消しゴム』（04年）を抜いて300万人が涙した韓国歴代 No.1 ラブストーリーとされている所以。そして、思わず私もここでどっと涙が溢れてきたことを告白しておこう。その感動が、どのようなアイデアで、そしてまたどのような仕掛けによって生まれたのかは、是非映画を観てのお楽しみに……。

チョン・ドヨン演技力のたしかさに感心！

私はウナを演じたチョン・ドヨンのことを、『スキャンダル』（03年）の評論の中で「木村佳乃に似たチョン・ドヨンさん、ちょっとかわいそう」と書いた（『シネマルーム4』192頁参照）。この映画では、その木村佳乃に似たちょっといい女が、薄幸の女からさらに HIV に感染するという難しい役柄を実に見事に演じている。映画冒頭のミニスカート姿で男をたぶらかす女から、農家に嫁ぎ夫の母親を大切にしながらしっかりと家事をこなす女、そして夜のまちで身体を売る

女から裁判で被告人となり、囚人となる女まで、その幅は実に広いもの。しかし、何ととっても彼女の演技で感動するのは、この映画全編を貫いているソクチュンに対する愛……。こんなたしかな演技力をフルに発揮したチョン・ドヨンが、この映画で大韓民国映画大賞主演女優賞、韓国映画評論家協会賞の主演女優賞、女性映画人フェスティバルの演技賞などを総ナメにしたのは当然……。

プラス15kg、マイナス12kgの演技にも感心！

ハリウッドビューティーのトップであるシャーリーズ・セロンが、『モンスター』（03年）での役になりきるため、体重を10kg増やしたという話には驚いた（『シネマルーム6』238頁参照）が、俳優の場合は役づくりのために体重を極端に増減するというのはよくある話。ハリウッドでは『インサイダー』（99年）でラッセル・クロウが体重を20kg増やし、『マシニスト』（04年）ではクリスチャン・ベイルが30kgの大幅減量。そして、韓国では『力道山』（04年）でソル・ギョングが、ヒーロー「力道山」になりきるために20kgの体重増、等々……。

こんな先例にならって、この映画でソクチュンを演ずるファン・ジョンミンが前半の農家の純朴な青年（おっちゃん）を演ずるためにやらなければならなかったことは、まず体重を15kg増加させること。他方、後半のウナを失い失意の中で過ごすソクチュンの憔悴感を示すために必要だったことは体重を12kg減らすこと。これによって、かつて100kgあった渡辺徹が現在85kgの渡辺徹に変身したように、同じ1人の人間ながら極端に変わった人物像になりきることに大成功……。

このファン・ジョンミンは、イ・ビョンホンが「これは私の代表作になる」と宣言した『甘い人生』（05年）で、イ・ビョンホンから叩きのめされるペク社長の役をやっていた俳優（『シネマルーム7』227頁参照）だから、もともと「四天王」と呼ばれるベ・ヨンジュン、イ・ビョンホン、チャン・ドンゴン、ウォンビンのようなハンサム系ではない俳優……？ そんなキャラだからこそこの映画の主役に最適として抜擢されたのだろうが、前述の体重の増減も含めて、ホントにいい味を出している。したがって、彼が『甘い人生』で青龍映画賞の助演男優賞を受賞したほか、本作で青龍映画賞の主演男優賞を受賞したのも当然……。ホントに良かったね……。

2006(平成18)年7月28日記